

# 教育新報

新大教育学部同窓会  
 第174号  
 発行人 白杵勇人  
 事務局 新潟大学  
 教育学部内  
 TEL(025)263-6760  
 印刷所 (株) 文久堂



## 母校のために

教育学部同窓会副会長 高橋いずみ

平成二十九年度も残りわずかとなりました。暖かな日の光に少しづつ春の気配も感じられるようになってまいりました。

今年度は、白杵勇人会長の「同窓会は教育学部と同窓生の応援隊」という基本方針のもと五つの活動の重点を大切にしながら活動を進めてまいりました。

一つ目は、「同窓生の集い」の充実です。今年度の「同窓生の集い」は、九月二十三日秋分の日にはアートホテル新潟駅前を会場に行いました。認定NPO法人ハートリンクワークキングプロ

ジェクト副理事長でいらっしゃる林三枝様を講師にお招きし、『小児がんの現況と社会的支援』についてご講演をいただきました。がんの治療が終わっても全てが終わるわけではなく、自立していくためのフォローアップ支援が必要であることや学校でのがん教

育の必要性を強く感じる、胸を打つご講演でした。

二つ目は、広報活動の充実です。今年度も、より親しまれる広報誌を目指して『教育新報』を発行しております。

これまで以上に大学との連携を図り、大学の状況、教職大学院の情報等も会員の皆様に伝わるよう分かりやすい紙面作りを心掛けてきました。今後も、同窓会の活動内容についてご理解していただけるような広報誌にしたいと考えております。

三つ目は、組織の充実と強化です。研修部・広報部・組織部・交流部の事業や各学科、支部の活動を充実させ、会員の帰属意識の向上を図ってまいりました。各部長を中心これまで活動内容について検討を重ね、同窓会活動への理解が深まるように進めているところと

四つ目は、大学との連携です。より一層の連携に向けて、今年度より教育学部卒業生への支援としてカミングホームデイを実施しました。今年度は、六月十七日に、卒業生の現在の状況や学部や大学院への要望、同窓会活動への提言等についての懇談を行いました。まだ周知されていないことや日程に課題もあり、連携強化に向けて今後改善していく必要があります。

五つ目は、全学同窓会との連携です。昨年度、全学同窓会は教育学部が担当しましたが、二十九年度は医学部が企画・運営に当たりました。全学部が揃う貴重な機会であり、様々な学部との交流が深まる和やかな一時になりました。

このように、今年度の活動も皆様のおかげで滞りなく進めることができました。心より感謝申し上げます。しかし、今、少子化と国の緊縮財政が一層進み、大学を取り巻く状況は決して明るいものではありません。このような時であるからこそ同窓会組織を強化し、会員が学部や学生の支援に一致団結して当たらなければならないと思っております。皆様方の母校に対する熱い思いを期待しております。今後も同窓会へのご理解とご支援を何卒よろしくお願いいたします。

## 花鳥風月

この夏休みに、校内体育実技講習会を行った。参加者は十数名。真夏の体育館。意欲メーターは、中程度である。

準備運動で体をほぐしていくと少しづつ気分がよくなってきた。主運動では、ペアを作り手を繋ぐなどして「二人で一緒」に運動した。誰かと一緒に体を動かす心地よさが増してきた。

最後は、全員で手を繋ぎ、輪になり安座をし、手を繋いだまま同時に立ち上がるということに挑戦することになった。なかなか成功せず、「終了」という雰囲気になった。その時、誰かが「もう一回挑戦しよう！」と声を出した。

再び、挑戦の始まりである。次第にアドバイスにも熱が入ってきた。まさに、アクティブラーニングである。

数分後とうとうその時がやってきた。成功したのである。誰からともなく沸き起こる拍手。互いに握手をしあった。大きな感動が生まれた瞬間であった。

私は、みんなで熱中して体を動かす汗を流すことが、こんなにも素晴らしいことであるということを感じることができた。

「みんなを動かすこと」自体は、大きな魅力と可能性をもっている。あとは、指導者がそれをどう生かし切るか、である。

(副広報部長 金子義則)

# 新潟大学教育学部同窓会

## 第四十四回同窓生の集い

研修部部长 渡辺真也

九月二十三日、アートホテル新潟駅前において「小児がんの現況と社会的支援」と題して、認定NPO法人ハートリンクワーキングプロジェクト副理事長、林三枝様よりご講演をいただきました。

### 一 記念講演会

(一) 開会の挨拶  
白杵勇人同窓会長から、最近の大学



講演会の様子

の動向や新学習指導要領などについての開会の挨拶の後、講師の紹介がありました。

講師の林三枝様は、旧新井市のご出身です。ご長女が小学校一年生の時に急性骨髄単球性白血病になり、その後治癒された経験から、小児がん経験者を社会的に支援する活動を始めました。その活動は海外からも注目されています。

### (二) 記念講演

小児がんとは十五歳未満で発症した全てのがんのことを指し、その種類は四百以上もあります。四十年ほど前は「不治の病」と言われていましたが、現在の治癒率は約八十%です。しかし、全国に推定十万人いると言われていて小児がん経験者には、治療が終わってからの副作用とも言える晩期合併症に苦しむ人が多くいるそうです。林様はご長女の実体験を元に、小児がん経験者が抱える様々な問題を解決するべく立ち上がりました。その一つは生命保険加入の問題です。一般の保険会社で

は医療保障付きの生命保険加入が困難であることを知り、自ら小児がん経験者を支えるハートリンク共済を設立しました。もう一つは就労問題です。就労困難な小児がん経験者の職業訓練を兼ねた就労施設をメディアアシップ内に開設しました。それがハートリンクワーキングプロジェクトです。これらの取組は世界的にも関心が高く、ボストンで行われた国際小児がん学会で発表したり、ソウルやトロントでも発表したりしたそうです。そして国から「認定NPO法人」として認められました。

改訂される新学習指導要領では「がん教育」の内容が導入されます。保健体育教師や養護教諭はもちろん、中高の全ての教員がその内容を熟知し、教育を行うことになるそうです。

小児がんを経験した子どもが復学したときの対応について、「先生に気を遣われすぎるのが一番つらい。保護者とゆっくり話し合い、対応に悩んだときは学校が主治医に遠慮無く相談してほしい。」と訴えました。

この講演会は事前に新潟日報で紹介されました。そして、当日の様子は紙面に大きく取り上げられました。林様の人脈の広さを感じるとともに、社会的に変話題性のある講演会になったと感じています。

### 二 懇親会

講演会の後、懇親会が行われました。参加者は、三十名でした。

- (一) 開会の挨拶 白杵 勇人 会長
- (二) 祝辞 柴田 透 学部長
- (三) 乾杯 藤井 保男 顧問
- (四) 懇親会

・ 林 三枝様からのご挨拶  
・ アトラクション

- (五) 万歳三唱 斎藤寿一郎 顧問
- (六) 閉会の挨拶 高橋 和人 副会長

六十三年にも及ぶ、歴史のある教育学部同窓会です。来年もたくさんの皆様から参加していただきますようお願い申し上げます。



# 会員の広場

## 島暮らし



粟島浦村立粟島浦小学校  
田巻 元子

平成二十三年に新潟大学を卒業し、現在は粟島浦小学校に勤務しています。島暮らしは驚きの連続でした。印象的なことは次の三つです。

### ① 海水浴場で水泳授業

学校の近くの海水浴場で水泳授業を行います。水がとても綺麗で、泳いでいる時に魚を見ることもできます。

### ② 給食が週二回

給食がない日は教員住宅に帰って、食事をとります。昼食と夕食はまかないさんが作ってくださいます。

### ③ とにかくおいしい島のごはん

島の方から旬の素材を使ったお料理をよくいただきます。いただいたお料理はどれもとてもおいしいです。つい食べ過ぎてしまうので、最近では島内ランニングをしています。

最初は不安でいっぱいだった島暮らしにもすっかり慣れ、今では毎日楽しく過ごしています。次の異動まで、思う存分、島暮らしを満喫しようと思います。

## 魚沼でまた会いましょう



魚沼市立小出小学校  
笠原 健児

結婚を機に魚沼地域を勤務の拠点にした。魚沼には、新採用や二校目に赴任してくる若い教員が多い。自身が主任として学年を組んだ初任者が、最近再び、近くの学校に赴任してきた。頼られる中堅的存在として頑張っているとのことで嬉しく思うと同時に、当時熱心に取り組んだ授業づくりのことや、失敗したことなども懐かしく思い出した。

同じように以前、魚沼で共に過ごした若者と研修会などで会い、様々な分野で活躍している姿にも会う。このことも元気をもらう材料である。

若者たちは、魚沼で数年を過ごし、まだ雪深い春に出身地や他の場所へ異動していく。苦楽を共にした者たちを送り出す時は本当に寂しい気持ちになるが、新任地で頑張ってほしいという思いも大きい。

今日もまた、若者たちと共に務め、子どもと向き合い、研修に励み、時には酒を飲み、共に学んでいる。また魚沼で会える日を楽しみにして。

## 求め続ける心



長岡市立中之島中学校  
田中 彩

大学院を修了し、教員2年目となりました。大学院では、様々な論文や文献を参考に授業づくりをしていました。実際教員になり、現場に出てみると、子どもたちの実態に応じた授業をする必要があると強く感じました。そのため、大学院で専門的に学んだ知識を活用し、今教えている子どもたちに何が有効かを考え、授業づくりに励んでいます。

また、私の経験を子どもたちに語るときにも、大学院で学んだことは大いに生かされています。例えば、語学留学や海外旅行の体験談を語ると、子ども達は目を輝かせて聞いてくれます。

教員として大切なことは、ただ教科を教えるだけではなく、私の経験を伝えることで、そんな世界もあるのだという新たな視点に気付かせることだと思っています。私自身もより成長するために、失敗を恐れずどんどん挑戦していきたいです。

## 好きなこと



新潟市立西特別支援学校  
小野かさね

大学時代は教育学部の国語科に所属し、ゼミで古典を学んでいました。友人や先生と一緒に、和歌や随筆から何百年も昔の人の思いを辿ることが大好きでした。同時に、特別支援教育にも興味があったので、講義を受講したり、障がいのある子どもたちと関わるアルバイトをしたりしていました。どちらを将来の仕事にするか迷った末、特別支援学校の教員になることを決めました。念願叶った今、まだまだ未熟ですが、子どもたちのお陰で、楽しく充実した日々を送っています。本当に、この道を選んで良かったと思います。

しかし、ふとした時に「国語の勉強も楽しかったな」と大学時代を思い返すことがあります。また、特別支援教育に携わるようになり、国語、特に言葉の持つ力の大きさを強く感じることもあります。いつか、特別支援教育を受ける子どもたちに「楽しい」「好き」と思ってもらえるような、国語や言葉の授業がしたいと思います。

学校紹介 ①

地域に学び 地域と歩む 学校

村上市立平林小学校

平林小学校は、清流荒川のほとり、そして平林城跡で名高い要害山の麓という自然豊かな場所にあります。

校区内には平林という名に誇りと愛着をもった住民が多く、地域全体で子どもをはぐくもうという意識が高い地域です。

平林小学校には「明るく、元気なあいさつができる子ども」という素晴らしい伝統があります。七十一名の子どもの姿を地域のみなさんがいつもあたたかく見守ってくださっています。

一 地域で学ぶ「全校登山」

自己有用感の醸成を学校経営の中核に据えている当校では、縦割り班で六月に全校登山（要害山）を行っています。今年度は悪天候のため実施できなかったのですが、毎年自身が自身の成長、居場所などを一人一人の子どもが実感できるように取り組んでいます。登山ボラ



ンティアとして、保護者以外に、平林城跡保存会、いわふね自然愛好会の皆様に多数参加していただいています。城跡の中を歩きながら説明を聞くことで、国指定史跡が地域にあることを誇りに思う子どもが年々増えています。

また、実際に昆虫や草花を手にし、解説をしてもらったり、質問をしたりする中で自然の豊かさを実感する機会にもなっています。

二 地域に学ぶ「職員研修」

職員が地域に学ぶということも大切にしています。

夏季休業中に平林城跡保存会、平林地域まちづくり協議会のメンバーを講師に迎え、「地域の歴史」「まちづくりの今までとこれから」について意見交換をしました。今まで感じなかった「平林の魅力」に気付く機会になりました。



また、九月には職員有志が城跡保存

会の史跡巡りツアーに参加しました。歴史的価値の高い史跡を見たり、当時の城主の足跡をたどったりして見識を深めました。

三 地域とつくる「学校行事」

運動会では平林地域まちづくり協議会が中心となった「まちづくり競技」を取り入れています。「ま〜ちが元気にな〜れ!」という掛け声とともにスリッパを飛ばす競技、地域ゆかりの色部氏の戦いをモチーフにしたお宝争奪戦など、子ども、保護者、地域の方々と職員がいっしょになって楽しむことができました。一体感が生まれ、運動会全体がおおいに盛り上がりました。学校がまちづくりの視点、まちづくり協議会が教育活動という視点をもち、双方のノウハウを最大限に活用することでWIN-WINの関係を構築することができました。

統合により、現在の校舎を使う期間が残り少なくなっています。地域のコミュニティとして歴史と伝統を紡いできた歴代の方々に感謝するとともに、現職が地域に学び、地域と歩む活動をより一層重視、推進することで、子ども「ふるさと平林への思い」をゆるぎないものにしていかなければならないと考えています。

(文責 藤城 真二)

平成二十九年

会務報告

平成二十九年



入学生保護者懇談会 (学部大講義室)

平成28年度会計監査 (じよいあす新潟会館)

第一回本部会(新潟教育会館) [評議会に向けての議案審議決定]

○懇親会(新旧役員)

評議会 (新潟教育会館) [平成28年度会務報告・決算報告]

【平成29年度役員の承認・活動の重点・専門部活動計画・予算案承認】  
○学科代表者会・支部長会

カミングホームデイ (学部小会議室)

教育新報「第173号」発行

役員会議

(アートホテル新潟駅前)  
\* 正副会長・専門部長・研修部による打合せ  
【同窓生の集いの打合せ】

8・26

7・20

6・17

6・10

5・3

4・19

4・5

学校紹介

②

地域と学校の願いを共有して  
教育活動を創る

新潟市立木戸小学校

当校は、明治七年に創立し、今年度創立百四十四年目を迎えました。児童数は三百九十九名で、最も多い頃に比べ、約五分の一に減少しました。また、昭和四十一年に建築された「はちのす校舎」は老朽化のため取り壊され、昨年の四月に、新校舎が完成しました。

地域は教育活動に大変協力的で、昨年度はのべ四千人がボランティアとして参加しました。この力を活用した教育活動の取組をいくつか紹介します。

一 課題を共有した「語る会」

地域住民と教職員とで、「二十年後の木戸小学校区を語る会」を開催し、児童の将来のために、自分たちが今できることについて話し合いました。そして、「児童が木戸地域のよさを知る学習活動を工夫して、木戸地域に誇りをもてるようにしよう。」という願いを共有しました。

二 木戸っ子お宝探検隊

これは、既存の全校縦割り班ウォークラリーを見直した活動です。これまでは、学校側が設定した学校と関係が

ある場所やお店を探したり、地域の方々と共に遊んだりする内容でした。これを、地域住民の自宅を訪問し、身近にあるお宝(人・物・場所)についてインタビューして、分かったことを班ごとにポスターにまとめて発表する形式にしました。これにより、児童は校区には、数多くのお宝があることを知り、地域を自慢に思うようになりました。



三 竣工式典で子ども樽太鼓を披露

昨年の十一月十八日(土)に校舎竣工記念式典を多数のご来賓、保護者、地域住民の参列のもと開催しました。式典後には、アトラクションの部を設定しました。その出演者として、自治会のお祭りでは披露していない子ども樽太鼓の皆さんを選出しました。

これは、大多数の児童や地域住民が知らない太鼓隊です。当該自治会長と地域教育コーディネーターの発案で実現

しました。当日は、威勢のよい演奏を披露し、会場から盛大な拍手が送られました。また、職員の発案で、全校合唱曲は「ふるさと」に決定しました。



全校児童が、木戸地域を大切に思う気持ちをよびかけで披露した後、四年生の伴奏で素敵な歌声を会場に響かせることができました。

四 ド木戸キ弁当づくり

六年生が家庭科の学習で、木戸小学校区由来の食材を調理したり、活用したりして弁当づくりに挑戦しました。

主食は五年生が校区在住の農家に学び育てたお米、主菜は学校隣接のはちのす商店街にあり、中学年時に訪問した精肉店の野菜、副菜は唯一の農家が育てる有機野菜と自分たちが育てた地域由来の山木戸カブにしました。

そして、調理した弁当はお世話になった方々と一緒に味わいました。

今後、地域の協力を得ながら、教育活動に工夫改善を加えて、地域を誇れる児童を育てていきたいと思えます。

(文責 高橋 宏昌)

9・23

第44回同窓生の集い  
(アートホテル新潟駅前)

○記念講演

・演題「小児がんの現況と社会的支援」

・講師 林 三枝氏

(認定NPO法人ハートリン  
クワイキングプロジェクト  
副理事長)

○懇親会

全学同窓会交流会

(ANAクラウンプラザホテル新潟)

○記念講演

・演題「がん治療を大きく変貌させる免疫療法の現状と今後」

・講師 後藤 重則氏

(瀬田クリニック東京院)

○懇親会

平成三十年

教育学部教員・職員と同窓会との懇談会

(じよいあす新潟会館)

教育新報「第174号」発行

第二回本部会(学部小会議室)

【平成29年度会務報告・各部署活動反省・会計執行状況】

【平成30年度の活動方針・予算案】

卒業式・祝賀会

(朱鷺メッセ・東映ホテル新潟)

3・23

# 全学同窓会交流会報告

広報部部长 本間アユ子

平成二十九年度新潟大学・全学同窓会交流会が、十月二十九日(日)にANAクラウンプラザホテル新潟で開催されました。

今年度は、医学部同窓会が計画、運営にあたり、新潟大学医学部の同窓生である後藤重則氏を迎えての記念講演となりました。



高橋姿新潟大学長の開会の挨拶の後、免疫療法において世界的権威である後藤氏より「がん治療を大きく変貌させる免疫療法の現状と今後」と題してご講演がありました。

二人に一人ががんになる時代になり、がんの免疫療法が、今、大きな注目を浴びています。がん細胞を攻撃する免疫という体の機能を使った治療が免疫療法です。がん細胞はこの免疫の攻撃にブレーキをかけて対向しますが、これを解除する薬が最近、登場したそうです。薬でブレーキを解除すれば、あとは体の自然の免疫機能ががんを排除してくれるのだそうです。さらには、

他の免疫療法によって攻撃を加速することで、より高い治療効果も期待されるでしょう。肺がんをはじめ一部のがんではすでに免疫療法が従来の化学療法に代わり、標準治療になってきているとのこと。

がんは本来、体が自然治癒させることが可能な病気であることが分かり、がん治療法は大きく変貌し、新たな時代を迎えていることが分かります。希望に繋がる講演会となりました。

講演会後には、アトラクションとして弦楽四重奏の演奏があり、心安らぐひとときでした。

懇親会は円卓で、学部を超えた交流が図られました。

また、サークルを代表して新潟大学のリズムダンスサークルの活動が紹介されました。代表の二人が軽快にダンスを披露し、今後の活動の抱負や同窓会からの支援に謝辞を述べていました。



## 先輩の声

### 新潟大学教育学部同窓会の発展を願って

中川幸次 (第一期)

同窓会の一期生は本年二〇一八年(平成三十年)に八十八歳を迎える。

(平成三十年)に八十八歳を迎える。感無量である。教育学部同窓会は昭和三十一年に長岡市公会堂で発会式を挙行した。

「長岡・中越の会」のメンバーで準備を進めた。数千枚の案内状をリヤカーで早朝に長岡郵便局へ運んだ。東の鋸山から登る朝日の光に明るい展望を誓った。

昭和五十六年に三分校が五十嵐キャンパスに統合した。それまで暗中模索の苦しい状況を克服し、若い世代の同窓生の努力によって現在の同窓会が中心となって学内庭園に「良寛と子ども」の像が立てられた。

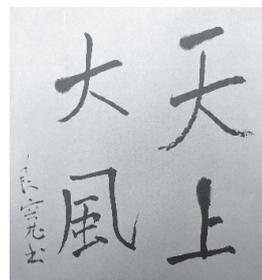
良寛は「温良ニシテ厳正」であったと言われている。(解良栄重「良寛禅師奇話」)良寛の人間性の真実が示されている。他人に対しては温良であり、自らに対しては厳正であるというのである。

加藤惺一先生は「良寛さんのように清く温かく素直でおおらかに」の精神が教職員や学生の中に浸透するよう期待してやみません」と述べている。「(良寛)誌(第二号)」。良寛の温かさは彼自身の厳しい禅の修行と詩歌書への芸術に対する探求の生き方によって

形成されたものである。

教育者は、自らの人格の完成を探索し続ける努力が求められる。良寛が子どもの風にならば「天上大風」と書いてやろうとする像に教育の本質を求めるところがでないだろうか。この像に托されるものが、教育学部の発展に生かされよう願いたい。

平成十六年には新潟大学全学同窓会が発会し、全学部一体の活動へと発展している。これを機に私たちは教育学部同窓会の目的の「会員の親睦と相互の資質向上を図る」ことを地道に実現する活動に努めていただきたい。



「人はその人となり(人格)によってのみ幸福たり得る。」と思いつている。

教育学部同窓会一人ひとりが教育を通して自らの生きがいと幸せを実現すべく前向きな同窓会活動を期待したい。昨年、記念のクリアファイルが完成した。同窓会長に依頼され、表紙に「教育学部同窓会」の文字を揮毫し、会の益々の発展と会員の幸せを願った。

教育学部との懇談会

教員志望の意欲向上を図る大学と  
教育現場の連携の在り方

交流部部长 永井高志

一月十八日(木)、新潟市中央区じよいあす新潟会館にて、「新潟大学教育学部教員・職員と同窓会役員との懇談会・懇親会」が行われました。毎年同窓会交流部が企画・運営する事業で今年度も多くの皆様にご参加いただき相互の願いや今後の方向性を共有する有意義な会合となりました。

学部からはご多用の中、柴田透学部長を始め、十三名の教員・職員の皆様からご出席をいただきました。同窓会からは、臼杵勇人会長以下十三名が出席しました。

懇談会では、臼杵会長の開会の挨拶の後、柴田学部長より、学部の現状についてお話をいただきました。その後、同窓会の各専門部(研修・広報・組織・交流・事務局)から今年度の事業概要の報告を行いました。最後に、高橋いずみ副会長から「母校の発展のため、充実した活動に取り組みたい」との挨拶で、懇談会を閉じました。

引き続き、会場を移動しての懇親会は、臼杵会長の開会の挨拶、八坂剛史副学部長からの乾杯のご発声で開宴となりました。懇談会で出された教育学部の現状やこれからの教職大学院への期待、カミングホーム・デーのさらなる充実等について語り合い、学部と同窓会との懇親を大いに深めることができました。

宮園衛附属新潟小学校校長から、学部と同窓会のさらなる発展への思いを込めて、万歳をいただきました。最後に、高橋いずみ副会長の挨拶で閉会となりました。



同期生の集い

第三十一期 (五十八年卒)

新潟校同期会

松野孝雄

昭和五十四(一九七九)年四月に新潟校に入学した四十八名。その同期会は今までも何度か開催されている。手元に残っている記録では、平成八年、平成十二年、平成二十年、平成二十四年に開催していることは確か。きつと、平成十二年と二十年の間にも開いているのだろうかと思う。

今回は、平成二十八年十月十五日に新潟市で開催した。

集まった同期生は十八名。なかでも、山形県から参加したTさんは初めての同期会。卒業以来、三十三年ぶりだったけれど、顔を見た瞬間、みんながTさんだと分かった。

年月は流れても、表情や声、話し方やしぐさには学生時代の面影がたくさん残っている。だから、話しているうちに「こんなことがあった」「あんなこともあった」と思い出が次々と蘇ってきて、話し込んでいる姿があららこちらに見られた。もちろん、近況も。

大学入学時に同じ教育学部の学生としてスタートした四十八名は、在校時からよく集まっていた。希望者を募って笹川流れや粟島に行ったこともある。今回の同期会で学生時代の写真が回覧された。見ると、飲み会での集合写真が何枚かある。とにかく集まろう、というまとまりのよさが当時からあったのだろうと思う。それが、三十年を経た今でも続いている。

同期会は、あっという間に終了。

「じゃあ、またね。」  
「次に会おう。」と会場を後にする。

どうやら次は東京オリンピックの年に開くらしい。



## 大学の「コーナー」

## 小学校英語教科化に向けて

人文社会・教育科学系副学系長 加藤 茂夫

新小学校学習指導要領（平成二十九年三月告示）において、小学校中学年に外国語活動、高学年に外国語（英語）科が導入されることが明示され、平成三十、三十一年の学習指導要領移行期を経て、平成三十二年度から全面实施となります。それを受けて、本学が文部科学省より受託を受け、「小学校英語教科化に向けた専門性向上のための講習の開催・実施」事業を開始し、今年度で二年目を迎えます（大学ホームページでの紹介は「研究・産学連携」↓「社会貢献」↓「生涯学習」↓「免許法認定講習」とお進みください）。

事業の目的として「小学校の現職教員が中学校教諭免許状（外国語（英語））を取得するための免許法認定講習等の開発・実施」および「小学校の現職教員が次期学習指導要領に即した新たな指導方法等を加えた専科指導に対応できるプログラムの開発及び講習の実施」の二点を掲げています。実施形態としては、小学校の教科英語の指導も可能にする講習を、年二回、新潟、長岡の二つの地区での対面式授業を展開

して、対象である現職教員の当該免許状取得の効率化を図ることを念頭に置いています。内容的には、本来中学校主免の学部生対象に開設している、教科としての指導法の科目を小学校英語に対応させ、教科に関する履修内容に小学校英語教育の視点で捉え直すことを試みつつ、講習を展開しています。講習は本学教育学部英語教育専修・教育心理学担当教員および教育・学生支援機構グローバル教育センターの所属教員で担当しています。私自身は、「英語教育と異文化理解」という講習を今年度、新潟、長岡の二つの地区で担当しています。受講生の先生方は非常に熱心に受講されていますが、同時にいよいよ実質的に来年度から始まる英語科に戸惑いと不安を覚えておられる雰囲気を感じます。

言語間の構造的な差異に焦点を当てた比較対照分析の研究はこれまでである程度綿密に行われてきた経緯がありますが、その違いが、日本のように外国語として英語を学ぶ際にどのように影響を与えるのかについては、まだ分か

## ○会費納入の御礼

会員の皆様、会費の納入ありがとうございます。ありがとうございました。学校代表の皆様方には

会報配布、会費の徴収、送金等、多くの時間と労力をお掛けしました。

支部長の皆様方には、各学校と事務局との架け橋となって、支援をいただきました。

新年度もご理解、ご支援を賜りたくよろしくお願いいたします。

## ○新年度体制に向けてのお願い

三月初旬に以下の報告の依頼状を送付いたします。

- ① 支部長の報告
  - ② 学科代表の報告
  - ③ 学校・機関の会員の報告
- 報告期限は四月二十日とさせていただきます。

年度末・年度始めの公私ともに多忙な時期での作業となりますがよろしくお願いいたします。

## ▼お悔み

同窓会顧問の安藤耕平様（第十代会長、平成元年～四年）が平成二十九年八月二十一日にご逝去されました。故人の生前のご功績に感謝し、衷心より哀悼の意を表します。

事務局だより